

カンボジアで自転車ツアー&文化体験、 タイではメディカルツーリズムを視察



木琴に似た伝統楽器にトライ



カンボジアの日差しと風を感じながらのサイクリング



国際機関日本アセアンセンターは、これまでにない斬新なASEANのツアー企画を公募する「ASEANツアー・プランニング・コンテスト」を実施した。幅広い層から集まった187点から選ばれた受賞作品をもとに、カンボジアとタイへ、受賞者を招いてモニターツアーが催行された。

世界遺産アンコールワットの前で、僧侶とともに記念撮影

斬新なASEANツアーの企画を一般募集

ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナムの10カ国からなるASEANには、年間約370万人の日本人が訪れている。しかし、その渡航先には偏りがあり、パッケージツアーで取り扱われる国は、一部の国に集中する傾向がある。さらにそれらの国の中でも、インドネシアならバリ島、フィリピンではセブ島など、デスティネーションに偏りがあるのが実情だ。

そこで、1992年から継続している「ビジットASEANキャンペーン」支援の一環として、旅行業界にこれまでにない新しいASEAN観光の魅力を浸透させるため、国際機関日本アセアンセンターは、07年に続き、「第2回ASEANツアー・プランニング・コンテスト」を実施した。

2回目となった今回は、旅行・観光学科の学生だけでなく、応募資格を一般に広げ、2008年9月から募集を開始。週刊トラベルジャーナル誌上のほか、専門学校や大学



審査会の様子

トラベルジャーナル誌上でも2回告知された



でのチラシ配布、JATA世界旅行博2008やグローバルフェスタJapan2008などのイベント会場でも広く告知が行われ、12月1日の締め切りまでに、前年を上回る187点の応募が寄せられた。その内訳は、学生174人(観光を専攻する学生が166人、その他8人)、会社員6人(観光関連が3人、その他3人)、その他が6人。学生には留学生約20人も含まれ、最高齢は66歳の女性だった。取り扱われた国は、タイがトップで100件、以下、ベトナム50件、マレーシア48件、インドネシア44件、カンボジア43件、シンガポール41件、フィリピン32件、ラオス25件、ミャンマー11件、ブルネイ6件と続いた。

187点のうち一次審査を通過した51点について、週刊トラベルジャーナル細谷昌之編集長を審査委員長に、旅行会社で実際にアジア方面の商品企画に携わるJTBワールドバケーションズ アジア部企画マネージャー水野恵子氏、ジャルパックアジア・中国部アジアグループ長五十嵐勇氏、エヌオーイー スカイツアー東京営業部部長米沢護氏、グッドラックツアー ホールセール営業部マネージャー志賀俊哉氏の5人が審査員として最終選考を実施。「旅行業界に新風を吹き込む斬新な企画」というコンテストの趣旨を踏まえ、新素材への対応、企画の斬新さ、商品バランス、実施の現実性、テーマ性の5つの視点からそれぞれの作品に点数を付け、審査が進められた。

その結果、オリジナリティーがあり商品実現化の可能性が高い企画として、韓国からの留学生の宋允貞さんが企画した、カンボジアとタイで仏暦正月の祭りを中心に文化体験をする『4月に迎える正月はいかが? カンボジア&タイの7日間の旅行』が「ASEANツアー企画大賞」に選ばれた。このほか、テーマが明確で旅行目的地としてASEANの特性を活か



井戸掘りについて話を聞く受賞者たち

している作品として、木舟周作さんによる『アセアン東西回廊を自転車で行く！ ベトナム・ラオス・タイ3か国400キロの旅』が「審査員特別賞」に。学生の応募でテーマが明確な「学生賞」は、若菜裕さんの『南国で過ごす充実の癒し空間～タイ・シンガポールでのメディカルツーリズム7日間』が、“こんな旅行がしたい”と思わせる夢にあふれた「夢いっぱい賞」には、宮野佑香さんの『象と一緒に8日間』が選ばれた(各受賞作品の詳細は次ページ)。

文化体験とメディカルツアー

「ASEANツアー企画大賞」をもとにしたモニターツアーが3月20日から26日まで、カンボジアのシェムリアップに3泊、タイのバンコクに2泊する日程で実施され、母国での就学のために帰国した宋さんを除く、受賞者3人が参加した。

シェムリアップでは、木舟さんの企画「自転車で行く」の要素を取り入れたマウンテンバイクによるツアーを実施。市内のホテルから、マウンテンバイクでアンコール遺跡群を目指した。シェムリアップ市街を抜けると、緑が続くアンコールワット通りの道は平坦で、快適なスピードで1時間ほど走り抜ける。樹木が絡みついた遺跡タブロムを見学後、さらに自転車で30分ほど走り、アンコールトムの中心にあるバイヨン寺院へ。そこから約15分の距離にある石造りの大寺院アンコールワットを訪れる。再びホテルに戻るまで、合計でおおよそ30km以上に及ぶ距離を自転車で巡った。地元の空気を感じながらの移動は、木舟さんの企画にあるように“通常の観光では味わえない”体験。自転車で巡ることで、アンコール遺跡群の広さも体感することとなった。

その日の午後には、宋さんの企画による「文化体験」のため、アート・オーファンセンター・アンド・ディベロップメント(A.O.C.D.)を訪れた。ここはカンボジアの孤児が国の伝統的な音楽や舞踊を学んでいる施設。子供たちが普段練習している木琴のロニエット、環状ゴングのコン、太鼓のスコートムという打楽器に挑戦した。もともと楽譜を使わずに伝承されてきた音楽なので、参加者たちも叩く位置や音色を、目と耳を頼りに合わせてみる。そのほか、祝いの舞であるココナツダンスも習った。一見ゆったりとした踊りも、実際にやってみると「自転車と同じくらいの運動量があった」とは参加者談。

シェムリアップ3日目も宋さんの企画がもたらした「井戸掘り」の視察で、アンコール遺跡群に隣接するブローム村のチュン・ムルンさん宅を訪れた。ここは3月に、観光客の寄付を資金にNGOによって井戸が設置されたばかり。きれいな水協会(井戸掘り協会)職員のチャ・ポーンさんが「貧しい家や父親がいない家を優先して井戸を設置している」と説明するように、チュンさんは、内戦で夫を亡くして以来、女手ひとつで5人の子供と13人の孫を育てている。「井戸ができて、300m離れたところまで水を汲みに行ったり、夜中に近所にもらいに行く必要がなくなった」と嬉しそ



ブローム村で水汲みに挑戦



子供たちの影絵の熱演を鑑賞

うに話す。

続いて訪れたスバエク(影絵)の工房、クメールアートは、孤児や貧しい子供たち約70人に影絵彫りの技術を教える個人運営の施設。子供たちから、釘と木づちを使って下絵のとおり牛の皮に穴を開けたり切ったりする技術を教わる。見よう見まねでやってみるものの、「意外に力加減が難しい」(宮野さん)。彼らが演じる「闘鶏」の影絵芝居も見学した。内戦の傷を残しながらも明るさを忘れないカンボジアの人々と接し、「子供たちが元気で、日本と対照的なのが考えさせられた」と木舟さんは語る。

一方、バンコクでは若菜さんによる「メディカルツアー」をもとに、バンコク病院へ。ここはホテル並みのサービスの特徴として、ガンや心臓病などの最先端医療からアンチエイジングまで、性転換手術を除くすべての治療が受けられる私立病院。ここで日本人専用クリニック(JMS)マーケティングエグゼクティブを務める堀内貴美子さんに、同クリニックとアンチエイジングセンターを案内してもらおう。医師はスカウトによる採用で、医師ごとに料金が異なったり、院内にスターバックスや日本食レストラン、ビザやツアーの手配もするコンシェルジュがあったりと、日本の病院とは受診システムから設備サービスまで、大きく異なる。歯学部で学ぶ若菜さんは「海外の病院の施設やサービスを見学できて勉強になった」と感想を述べた。



近代的な私立バンコク病院



タイの医療システムのレクチャーを受ける



バンコクのワットポーで
マッサージを体験

今後のツアー企画のヒントに

3月31日には、コンテストの表彰式が、国際機関日本アセアンセンターの第28回年次理事会の中で行われた。審査委員長の週刊トラベルジャーナル細谷昌之編集長は、「受賞した作品は、“そこでしかできない体験”や、その人ならではの着想で、新たなツーリズムの可能性を示唆するものだった。残念ながら選外となった作品も含め、どの作品もコンセプトやメッセージが明確で、若年層の海外旅行に対する熱い気持ちを感じた。今後のツアー企画のヒントに十分なりえるだろう」と述べた。

4月から新社会人となる宮野さん、現役歯学部生の若菜さん、旅行会社に勤める木舟さんは、それぞれ日本アセアンセンターのハジ・タリ・ラーマン観光交流部長から楯と賞状を授与された。



表彰式の様子／左から日本アセアンセンターのハジ・タリ・ラーマン観光交流部長、受賞者の木舟さん、宮野さん、若菜さん、週刊トラベルジャーナルの細谷昌之編集長、同センターの洲上英慶観光交流部長代理

受賞作品

ASEANツアー企画大賞

『4月に迎える正月はいかが？ カンボジア&タイの7日間の旅行』

宋允貞さん ホスピタリティ ツーリズム専門学校

タイとカンボジアで、仏暦の正月である4月に行われる祭り「ソンクラーン(水掛け祭り)」への参加をメインに文化体験をする。タイでは、3日間にわたって行われるソンクラーンの1日目である4月13日にチェンマイの寺院を訪問、仏像を洗う儀式や水を掛け合う様子を見学。カンボジアでは15日にシェムリアップのカンボジア文化村を訪れ、水掛け祭りに参加する。また、現地の人々との交流を目的に、チェンマイのローンウワデー村で稲刈り作業を手伝いながら村のホームステイ先でタイ料理を習う。さらにバンコクではタイの伝統舞踊を練習、最後には舞台用のヘアメイクと衣装を着せてもらい、記念写真を撮る。シェムリアップでは、ライトアップされた夜のアンコール遺跡を見学するほか、井戸掘りのボランティアを手伝い、現地の練習生と一緒にカンボジアの伝統楽器を習い、NGOが支援するスパエク工房で彫絵作りを体験する。

審査員特別賞

『アセアン東西回廊を自転車で走る！ ベトナム・ラオス・タイ3か国400キロの旅』

木舟周作さん 会社員

成長激しいASEAN諸国で注目されるベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーを結ぶ「東西回廊」の主要区間となる約400kmを自転車で走行し、アセアンの「今」を体験する。通常の観光旅行では味わえない素朴な風景を楽しみ、地元の人との触れ合い体験が醍醐味となるツアー。

学生賞

『南国で過ごす充実の癒し空間 タイ・シンガポールでのメディカルツーリズム7日間』

若菜裕さん 神奈川歯科大学

働く女性を対象に、歯の美容と健康のための医療を日本より低料金で受ける「デンタルツアー」。シンガポールの診療所で問診から、ホワイトニングやPMTc(歯の洗浄)、口臭改善ケアなどの治療を受けるほか、スパ、足つぼやタイ式のマッサージも盛り込み、ヘルシーな食事にもこだわる。

夢いっぱい賞

『象と一緒に8日間』

宮野佑香さん ホスピタリティ ツーリズム専門学校

マレーシアにある象の保護区クアラガンダで象について学んだ後、タイ・チェンマイにある象使いの村メービンエレファントビレッジで象の世話をしながら象使いと共に生活する。象使いの練習を積んだ後、最後には、観光客からお客を迎える側になって、象のショーを披露するという内容。

09年4月にリニューアルオープン——国際機関日本アセアンセンター

国際機関日本アセアンセンターは、ASEAN加盟国政府と日本国政府によって1981年に設立された国際機関。09年4月、事務所を新橋に移し多目的ホールを新設、総合インフォメーション・コーナーをリニューアルオープンした。同センター観光交流部では、日本からASEAN諸国への観光を促進するため、ASEAN観光マップの作成、観光DVDおよび写真画像の貸出・提供、「ASEAN観光フェア」などのイベントや各種セミナーの開催、ASEAN観光関係者への研修プログラムの実施など、幅広い観光広報事業を実施している。

新しくなった総合インフォメーション・コーナーは、近代的なASEANのカフェをイメージして設計された空間で、日本アセアンセンターの出版物をはじめ、ASEAN諸国と日本との貿易、投資、観光に関する資料を設置・配布している。センターの活動やASEANの観光地の映像も上映しているほか、ASEAN各国の英字新聞、地元の情報誌やガイドブックなど、現地でしか手に入らない冊子も各種ある。インターネットの使用も可能。最大160人を収容できる多目的ホールのASEAN-Japan Hallは貸し出しも行っている(要相談)。



ホテルのラウンジのような総合インフォメーション・コーナー



御成門の駅から
わずか徒歩1分

国際機関日本アセアンセンター

〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル1F

アクセス 都営地下鉄三田線御成門駅A4出口より徒歩1分、JR新橋駅より徒歩10分

観光交流部

Tel : 03-5402-8008 FAX : 03-5402-8009

■開館時間：午前9:30～午後5:30(入館料無料)
(土・日・祝および年末年始を除く)